

特集

日本初の歩行者天国

旭川買物公園半世紀の歴史 温故知新で新たな魅力創出へ

▲美しい街路樹が続く買物公園

歩行者天国というと東京・銀座をイメージする人が多いだろうが、「日本初」の称号を有するのは、旭川駅前から続く平和通商店街、通称「買物公園」である。その買物公園が6月1日、オープン50周年を迎えた。駅前や商店街の風景は様変わりしたが、昔も今も「市民が主役」の憩いの空間であることに変わりはない。公園誕生の背景には、市民の情熱が大ムーブメントとなり、法律を盾に「国道からの転用は認められない」の一点張りだった国を動かすという壮大なドラマがあった。100年目へ向けて新たな魅力の創出を目指す、買物公園半世紀の歴史を振り返ってみたい。

(フリーライター・内海達志)

かつて兵士が通った道

爽やかな初夏の北海道は、屋外で過ごすのが気持ちいい。人通りが少なく静かな8条通側から、約1キロにわたって続く商店街を歩いてみた。
改めて気付いたのは、道幅が20メートルと広いので開放感があり、なおかつ緑に恵まれていると



世界である。

1899 (明治32)

年に陸軍第七師団の本拠地が札幌から旭川に移転され、師団へと続く道は「師団通」と呼ばれるようになった。沿道には店舗が並び活況を呈したが、戦時中は出征する兵士が軍靴を響かせ黙々と行進する悲しい場面もみられた。終戦を機に第七師団は解体され、平和への願いを込め「平和通」と改名されたのである。地元出身の作家・三浦綾子は、美しく生まれ変わった平和通に驚

き、「週刊朝日」に以下のよう一文を寄せている。

《メインストリートの平和通りは花壇や花時計、噴水、丸木づくりのベンチ、木馬などがある買物通り公園となった。そこに嬉々として遊ぶ子どもたち、ベンチに憩う老人たちを眺めながら、わたしは涙がこぼれる思いがした》

三浦が落涙の衝動に駆られたのは、師団通時代に次兄がこの道を通って戦地へ赴き、帰らぬ人となった辛い思い出があったからだろう。

戦後、大きな転機となったのは、1963 (昭和38)年の五十嵐広三市長誕生である。当時、全国最年少市長(37歳)として注目を

五十嵐市長の思いが結実

1969 (昭和44)

集めた五十嵐氏は、「車社会からの解放」「人間の性の回復」といった高邁な目標を掲げ、恒

年には、議論の場として市、商工会、青年層から成る買物公園企画会議が発足し、歩行者専用道路化に向けた社会実験が提案された。

だが、すでにモーターゼーションの波は地方にも及んでおり、1日約1万6千台の交通量があったため、約8割の商店主が「車を通行禁止にすれば人が来なくなる」と危惧し、計画に反対したという。

一方、関係省庁も「国道を通行止めにするという実験は法規上認め

久歩行者道路化計画を発表。ここから買物公園構想が動き始めたのだった。

られない」と繰り返すばかり。計画は頓挫の危機に直面したが、商店主への地道な説得によって理解が広まり、さらに2代目商店街理事長だった山本政治郎氏の「かつて土農工商

という言葉があったが、現在も生きているのだろうか」「実験を真剣に考えている若い芽だけはどうか摘まないでくれ」という熱いメッセージがターニングポイントとなり、実験への気運が一気に高まった。

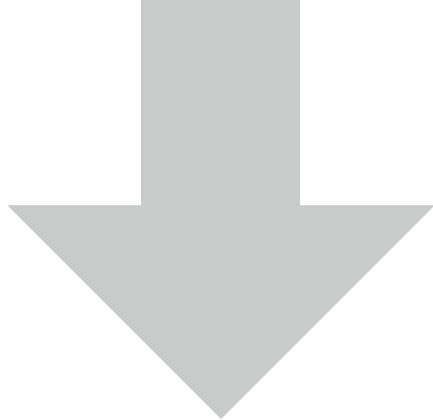
同年8月6日から17



▲明治後期の師団通 (「50年のあゆみ」より)

日までの12日間、実験の場として旭川夏まつりを開催。車両が消えた会場に延べ約92万人が集まり、この壮大かつ斬新な社会実験は成功裏に終わった。

幅広い市民の支持を得て、計画は大きく前進する。買物公園の基本設計は上田篤・京都大学助教授を中心とす



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)